

金子奈美

昨年十一月、バスク語作家キルメン・ウリベが、日本で翻訳が刊行されたばかりの小説『ビルバオー・ニューヨーク・ビルバオ』（白水社）のプロモーションのために初来日した。彼はスペイン・バスク地方の出身（一九七〇年生まれ）で、今や国際的に活躍する人気作家である。一週間にわたった日本滞在のあいだ、都内の二カ所と沖繩の那覇市で講演と朗読会が催された。ここに収録されたのは、ウリベが日本にきて最初に行なった本学での講演である。

『ビルバオー・ニューヨーク・ビルバオ』は、作者と同名の主人公を語り手として、彼の世界を織り成す人々の緩やかな繋がりを、断片的なエピソードの数々をつうじて繊細かつみずみずしい筆致で綴った作品だ。バスクの中心都市ビルバオからニューヨークへと向かう飛行機のなかで、語り手は代々漁師だった自分の家族の歴史、故郷の港町オンダロアにゆかりのある画家や政治家たち、彼らの生きた時代を思いを馳せながら、それらを題材に今小説を書こうとしている自分を取り巻く出来事について考えを巡らせていく。そうしてあたかも漁網の目のように編み合わされていく一つひとつのエピソードは、いくつもの時間や空間を行き来して、作者一語り手の目に映る世界の姿を詩的なモザイクとして描き出している。

私はこの小説の邦訳を手がけた縁で、ウリベの来日講演のコーディネートを務めることになったのだが、一般の日本の読者にとってバスクというのは縁遠いくにである。そこで講演では、バスク語で書くというのとはどのような意味をもった行為なのかということ、そして少

数言語の書き手としての立場から見えてくる今日の世界や文学のヴィジョンについて、作家自身に自由に語ってもらうことにした。

バスクと聞いておそらく多くの人は、日本にも時折伝わってくるニュースから、テロや独立闘争を連想するのではないだろうか。歴史が好きな人なら、日本人なら誰でも知っている宣教師フランシスコ・ザビエルがバスク人だったとか、スペイン内戦中にドイツ軍の激しい空襲を受け、ピカソの絵画で世界中に知られるようになったゲルニカがバスクの町だということを知っているかもしれない。あるいは、言語学に関心のある人であれば、系統不明の謎の言語として知られるバスク語の話はきつと聞いたことがあるだろう。しかし、その言語で文学が書かれているということ、はたしてどれほどの人が知っているだろうか。

ピレネー山脈を挟んでスペインとフランスにまたがるバスク地方には、それぞれの国の言語のほか、バスク語（エウスカラ）というこの地域固有の言語を話す人が七〇〃八〇万人ほどいる。いまだに起源もわかっていないほど古い言語なのだが、かつてはラテン語、その後はスペイン語やフランス語といった政治的にも文化的にも強大な言語との接触につねにさらされてきたために、もっぱら民衆のオーラルな使用の領域にとどまって文学の言語としての発展が遅れた。しかし二〇世紀後半になって、とくにスペイン内戦後にバスク語の使用を弾圧したフランコ独裁体制が終焉を迎えた一九七〇年代中頃から、バスク語の書き手は急激に増え、質の高い文学作品を次々と生み出してきた。

キルメン・ウリベが講演の際に何よりも強調したのは、少数言語であるバスク語を今日まで守り抜き、文学の言葉としての可能性を押し広げていった先人たちの努力のおかげで、彼のような作家が現代において「バスク語で自然に生き、自然に書く」ことが可能になったということだ。かつてバスクの有名な言語学者コルド・ミチエレナは、「バスク語の最大の謎は、起源が不明だということよりもむしろ、今日ま

で生き延びてきたということである」と語ったが、ウリベは講演後の質疑応答のなかで、「言語への愛」という言葉を幾度も口にした。それこそが、バスク語を使い続け、バスク語で創作を行なう最大の原動力なのだ。

古くからの伝統を守り抜こうとするバスク人の頑固さは、しばしば排他的なナショナリズムと混同される。しかし、中世から鯨を追って世界の海を渡り歩き、大航海時代から現代に至るまで大量の移民を新大陸へ送り出してきたバスクの人々は、実は外に開かれた気質の持ち主でもある。スペイン内戦やフランコ独裁といった歴史の惨禍は、たんにバスク／スペインという対立構造を深刻なものにしただけでなく、政治信条や立場を異にするバスク人同士の間にも生み出してきた（ETA「祖国バスクと自由」のテロリズムはその延長線上にある）。しかし、そうした対立がもっとも激化したときでさえ、「頭で考えること」よりも「心で感じることを」信じて、他者との絆を保ち続けた人々がつねに存在してきたことは、ウリベが『ビルバオ・ニューヨーク・ビルバオ』のなかでさまざまなエピソードを介して語っているとおりで。

講演とその後の質疑応答のなかでとくに印象に残ったのが、「バスク語には、長い歴史のなかでバスクを通していったさまざまな民族のことばの痕跡が残っている」というウリベの発言だった。これを聞いて私は思わず膝を打ちそうになったが、そう、そうなのだ。バスク語はその特異性から「孤立言語」とよく言われるが、バスクの言語と人々が孤立しているわけではけっしてない。バスク語を愛するということは、とりわけウリベの場合、その響きのなかに他者の存在を受け入れ、招き入れることへと繋がっていく。マイノリティとして疎外され、迫害された言語の使い手がその体験を乗り越えたとき、そこにはどんな新しい光景が開けてくるか。そのことをウリベは『ビルバオ・ニューヨーク・ビルバオ』という作品と本学での講演をつうじて、日本の読者に向けて雄弁に語ってくれた気がする。

\*

最後に、バスクへの関心を広げるのに役立つ書籍をいくつか紹介しておこう。

- ① 『現代バスクを知るための50章』 萩尾生・吉田浩美編著、明石書店、二〇二二
- ② 『バスク語のしくみ』 吉田浩美著、白水社、二〇〇九
- ③ 『オババコアック』 ヘルナルド・アチャガ著、西村英一郎訳、中央公論新社、二〇〇四

①は昨年刊行されたばかりで、バスク地方、バスク人といった基本的な概念から、伝統的な習俗、歴史、政治、言語、文学、音楽、アート、スポーツ、食文化にいたるまで幅広いテーマを網羅し、最新情報も満載。同様の入門書には、『バスク人』（ジャック・アリエール著、萩尾生訳、白水社文庫クセジュ、一九九二）、『バスクとバスク人』（渡部哲郎著、平凡社新書、二〇〇四）などがある。

②はバスク語に初めて接する人のために、新書感覚で読めて、言語の基本的なしくみと簡単なフレーズが覚ええられる（CD付き）。言語学的な説明が物足りないという人には、同じ著者の『バスク語基礎1500語』（大学書林、一九九〇）の巻末に収録されている「バスク語文法のあらまし」が役立つだろう。その続編で『バスク語常用6000語』（大学書林、一九九二）という単語集もある。

③はウリベも多大な影響を受けた、現代バスク文学における最高の書き手アチャガの代表作。スペイン語からの翻訳だが、架空の村オババをめぐる幻想的なストーリーと、バスク語でいかにして書くかというメタ文学的な冒険とが交錯するめくるめく作品世界をご堪能あれ。